The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語学系学術論文におけるモダリティの使用 : 結論におけるモダリティの使用を中心に
Author(s)	ターインタ, プーワット
Citation	日本語・日本文化研究. 2018, 28, p. 139-149
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71155
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語学系学術論文におけるモダリティの使用
—結論におけるモダリティの使用を中心に—

ターインタ　プーワット

1. はじめに

日本の大学院に留学する日本語学習者は、日本語でレポートや論文を執筆することが求められる。論文執筆の際に、結論などで結果に関する意見や研究の不足部分に対する評価を示さなければならない機会が多い。そこで、適切かつ効果的に意見や態度を表現することができるようになるために、日本語の学術論文におけるモダリティの形式がどのように使用されているのか、その使用実態を知っておく必要があると考える。レポートや学術論文などのアカデミックライティングにおけるモダリティの形式の使用に関する研究は、川端（2013）や小森（2014）などがある。川端（2013）は学術系雑誌における「思う」と「考える」の使用について考察し、小森（2014）は学術論文における意見を述べる「と思う」「と考える」「と思われる」「と考えられる」の使用傾向を考察した。しかし、日本語学習者が意見・態度を表現する際に、これら四つの形式だけではなく、推量や蓋然性、必要性などを表す他の形式を使用することもある。そこで、本研究では日本語の学術論文における意見・態度を表すモダリティの使用実態について理解することを目的に、次のような課題を設定する。

(1) 日本語学系学術論文の結論における意見や態度を表すモダリティはどのように使用されているか、その使用実態を考察する。

(2) 日本語学系学術論文の結論において書き手がどのような視点を基にそのモダリティを使用しているのかを明らかにする。

2. 先行研究

2.1 モダリティの分類

日本語のモダリティの分類を包括的に述べている研究は、仁田（1989）、益岡（1991）、日本語記述文法研究会（2003）などがある。本研究は、日本語学系学術論文の結論におけるモダリティの使用を中心に見るため、文の内容に対する意見や態度を表すモダリティについて詳説している日本語記述文法研究会（2003）を基に、学術論文の結論におけるモダリティの使用実態を考察する。下の表 1 は、日本語記述文法研究会におけるモダリティの分類である。

表 1　日本語記述文法研究会（2003）におけるモダリティの分類

モダリティの分類
1. 文の伝達的な表し分けを表すモダリティ 1.1 表現類型のモダリティ 1.1.1　情報系の表現類型：叙述のモダリティ、疑問のモダリティ

1.1.2　行為系の表現類型：意志のモダリティ、勧誘のモダリティ、行為要求のモダリティ、感嘆のモダリティ
2.　事態に対する捉え方を表すモダリティ
2.1　評価のモダリティ
2.2　認識のモダリティ
3.　先行文脈と文との関係づけを表すモダリティ
3.1　説明のモダリティ
4.　聞き手に対する伝え方を表すモダリティ
4.1　丁寧さのモダリティ
4.2　伝達態度のモダリティ

2.2 学術論文におけるモダリティの使用

学術論文におけるモダリティの使用について述べている研究は川端（2013）や小森（2014）がある。川端（2013）は、学術系雑誌における「思う」と「考える」の使用について考察し、「思う」は私見や本論の外での位置づけ、および筆者の立場を述べる文で使用し、「考える」はデータに基づいた思考の作業が行われた結果「想定する・仮定する」に置き換え可能な文で使用することを提案した。小森（2014）は、日本語母語話者による人文・社会学系の学術論文における意見を述べる「と思う」「と考える」「と思われる」「と考えられる」という文末表現の使用傾向について考察した。結果としては、これら四つの形式がそれぞれの機能を持ち、また分野によって使用箇所と指向される表現が異なることが提案されている。しかし、論文執筆の際にはこれら意見を述べる形式のみならず、日本語学習者自らの意見や態度を示すのに推量や蓋然性などを表す他の表現を使用することもあると考える。そのため、本研究では日本語学系の学術論文において意見や態度を表すモダリティがどのように使用されているのか、書き手がどのような視点を基にそのモダリティを使用しているのかを明らかにする。

3. 調査概要

3.1 調査対象

上で述べたように、論文執筆における適切なモダリティの使用について考えるためには、まず論文におけるモダリティの使用実態を知っておく必要がある。そのため、日本の大学院に留学する日本語学習者の参考になるように、本研究は日本語学系学術論文を対象にする。論文数は合計 40 編（日本語学 20 編、日本語教育学 20 編）である。下の表 2 は本研究の対象とした論文の掲載学会誌の詳細である。

表 2　本研究の対象とした論文の掲載学会誌

学術雑誌名	発行団体名	論文掲載巻（号）	発行年
日本語教育	日本語教育学会	163-167 号	2016-2017
日本語・日本語教育研究	日本語・日本語教育研究会	7-8 号	2016-2017
日本語の研究	日本語学会	13 巻 1-4 号	2017

3.2 調査範囲

本研究は、佐藤他（2013）で提案された論文の構成要素の中から、書き手が自分の意見や態度を示す機会が多いと考えられる要素として、「結論の提示」「提言」「研究の評価」「今後の課題の提示」という四つの要素を対象にし、結論におけるモダリティの使用実態を考察する。今回は、叙述を表す文章または断定を表す文章ではなく、書き手の意見や態度を表す文章を対象にする。下のア）－　ソ）は、佐藤他で提案された論文の構成要素である。

ア）研究の対象　イ）先行研究の検討　ウ）研究目的の提示
エ）研究行動の提示　オ）研究方法の説明　カ）数式の提示
キ）結果（量的データ）の提示　ク）結果（質的データ）の提示
ケ）資料（量的データ）の提示　コ）資料（質的データ）の提示
サ）考察　シ）結論の提示　ス）提言
セ）研究の評価　ソ）今後の課題の提示

3.3 調査方法

前述したように、本研究は日本語学系学術論文の結論におけるモダリティの使用実態を考察する。ここで言うモダリティの使用実態とは、そのモダリティの形式がどのような意味で使用されており、書き手がどのような視点を基にその形式を使用するかということである。調査方法としては、まず対象とした学術論文の結論を収集し、「結論の提示・提言」「研究の評価」「今後の課題の提示」に分けて意見や態度を表すモダリティを含む文を収集する。次に、日本語記述文法研究会（2003）で提案されたモダリティの分類を基に収集した文を分類する。その後、対象とした全ての論文の中にモダリティの各形式を使用した論文は何編あるかを数え、総編数あたりの出現率を表す。一人の書き手が同じ形式を複数回使用することは、その書き手の癖ではないかと考えるため、同一の論文で同じ形式が複数回使用されている場合も、一編と数える。最後に、なぜモダリティの各形式が結論で使用されているのか、なぜ総編数あたりの出現率が異なっているのか、その形式の意味・用法・機能や「モダリティの値[1]」、「主観性・客観性」などを考慮し、意味論的に分析する。

4. 結果と分析

4.1 結論の提示・提言におけるモダリティの使用実態

結論の提示・提言において認識のモダリティの形式や意見を述べる形式などが使用されていることがわかった。結論の提示・提言におけるモダリティの使用をまとめると、表 3 のようになる。

表 3　結論の提示・提言におけるモダリティの使用実態

認識のモダリティ		その他
推量	蓋然性	意見・判断・傾向
形式：編数、総編数あたりの出現率		
「だろう」　9 編、22.5% 「のではないだろうか」　2 編、5%	「かもしれない」　2 編、5% 「可能性がある」　1 編、2.5% 「かねない」　1 編、2.5%	「と考えられる」　15 編、37.5% 「と言える」　9 編、22.5% 「と考える」　6 編、15% 「と思われる」　3 編、7.5% 「がち」　1 編、2.5%

各形式の総編数あたりの出現率を見ると、推量や蓋然性を表す形式より意見を述べる形式の方が多く使用されていることがわかる。以下、結論の提示・提言における各形式の使用について述べる。

4.1.1 推量を表す形式

結論の提示・提言では「だろう」と「のではないだろうか」の使用が見られる。日本語記述文法研究会（2003）によれば、「だろう」は主張を控えめにする断定回避の用法があるため、結論の提示・提言で使用されやすいのだと考えられる。しかし、澤田（1993）で指摘されているように、「だろう」は推量・判断を表す主観的表現であるため、表 3 のように「と考えられる」より使用される頻度は少ない。下の 1）は「だろう」を使用している例である。

1）そうすることによって、「ものだから」の特徴が理解しやすくなり、さらに、なぜ「ものだから」を「言い訳・弁解」の用法で用いるのかもよりよく理解できるものとなるだろう。

（『日本語教育』165 号, p.69）

次に、「のではないだろうか」の使用について述べる。結論の提示・提言で「のではないだろうか」を使用した論文は 2 編しか見られなかった。これは、日本語記述文法研究会（2003）で述べられているように、「のではないだろうか」は推量判断が未成立であることを表す意味を持つため、論文全体の信頼性に関わる結論にはあまり使用されていないからだと考えられる。下の 2）は「のではないだろうか」を使用している例である。

2）バトラー（2011、p.32）は、米国の英語学習者の多くが、米国生まれるであると述べているが、日本生まれ・育ちの JSL の子どもたちの中にも、教科学習の内容を十分理解し修得するための日本語指導（支援）を必要とする子どもが、公的な調査に表れている数よりも、実際は多く存在するのではないだろうか。

（『日本語教育』163 号, p.13）

4.1.2 蓋然性を表す形式

結論の提示・提言では「かもしれない」「可能性がある」「かねない」の使用が見られるが、表 3 の通り、「かもしれない」はあまり使用されていない。理由としては、「かもしれな

い」は低い度合の蓋然性を表す形式とされているからだと考えられる（仁田 1991、益岡 1991 等）。また、Halliday（1985）で提案された「モダリティの値」に従うと「かもしれない」は高位の値の確かさを持っている形式ではないため、論文全体の信頼性に関わる結論にはあまり相応しくないのだと言える。下の 3）は「かもしれない」を使用している例である。

3）例えば、話者がある状態をとらえてその状態に有標性を感じ取った場合、過程が言語化されやすくなるかもしれない。

（『日本語・日本語教育研究』8 号, p.17）

次の形式は「可能性がある」である。「可能性がある」は「かもしれない」と同様に低い度合の蓋然性を表す形式とされているため、論文全体の信頼性に関わる結論であまり使用されていないのだと言える。下の 4）は「可能性がある」を使用している例である。

4）今回、母語話者が使用した表現形式については、中級学習者にとって既習の可能性が高いことから、学習者は知識としては持っているが、実際の文脈の中で効果的に使えない状態である可能性がある。

（『日本語・日本語教育研究』8 号, p.227）

最後の形式は「かねない」である。結論の提示・提言で「かねない」は一回しか使用されていない。これに関しては、日本語記述文法研究会（2003）で述べられているように、「かねない」は可能性を表す形式であるが、望ましくないという意味を含む形式として使用されるため、結論の提示・提言であまり使用されていないのだと考えられる。下の 5）は「かねない」を使用している例である。

5）しかし、「取り立て」という術語が日本語学だけでなく、日本語教育の分野にも広く浸透している状況にあって、元来 1 つのものであり、大部分が重なり合うものに別々の呼称を与えることは、両者が似て非なるものであるとの誤解を招きかねない。

（『日本語教育』166 号, p.26）

4.1.3 意見・判断・傾向を表す形式

4.1.3.1 意見を述べる形式

結論の提示・提言では「と考えられる」「と考える」「と思われる」の使用が見られる。表 3 の通り、「と考えられる」は推量や蓋然性を表す形式より多く使用されており、意見を述べる形式の中で総編数あたりの出現率も最も高い。これは、「と考えられる」はデータ解釈にあたっての真偽の不確実性を客観的なテクストで表す形式であるためだと考えられる（森山 2000）。また、小森（2014）は結論が論文全体の信頼性に関わるため客観度の高い「と考えられる」が求められると述べており、その理由から結論の提示・提言で多用されているのだと言える。下の 6）は、「と考えられる」を使用している例である。

6）2 点目は、中・高年齢層が専ら 4 モーラ短縮形を好む一方、若年齢層には 3 モーラ短縮形という変則形をも許容する傾向が認められた点である。これは、短縮語を使用する言語運用者が持つ方略の相違によるものであると考えられる。

（『日本語の研究』第 13 巻 3 号, p.30）

次の形式は「と考える」である。結論の提示・提言で「と考える」は推量を表す「のではないだろうか」や蓋然性を表す形式より多く使用されている。これに関しては、高橋（2003）で述べられている通り、「思う」の引用節が「判断内容」であり、「考える」の引用節が「結論」であるため、提言を述べるのに「と考える」が使用されやすいのだと考えられる。下の 7）は、「と考える」を使用している例である。

7）本研究の結果から、日本語教育での導入においては、「ものの」は「注釈」を表す文型として表示していく必要があり、そのためには「P ものの Q」は直前の文・節も含めた文脈の流れで導入していく必要があると言えるだろう。そうすれば、「が」「けれど」との違いも説明でき、学習者にとって理解しやすいものになると考える。

（『日本語教育』166 号, p.43）

最後の形式は「と思われる」である。テュシェ（2006）は、「と思われる」は書き手の意見の主観度を下げて客観度を高める形式としているため、結論の提示・提言で使用されているが、「と思われる」を使用した論文は 3 編しか見られなかった。理由としては、論理的にそのような結論になるという意味を考慮すれば「と思われる」より「と考えられる」と「と考える」の方が使用されやすいのだと考えられる。下の 8）は、「と思われる」を使用している例である。

8）今回取り上げた現象は、日本語を教えたり、研究したりしている方にとってはなじみのあるものばかりだと思われる。

（『日本語・日本語教育研究』8 号, p.241）

4.1.3.2 判断を表す形式

結論の提示・提言では「と言える」の使用が見られる。表 3 の通り、「と言える」は「と考えられる」と同じく推量や蓋然性を表す形式より多く使用されている。これに関しては、森山（2000）で指摘されている通り、「と言える」は話し手が自分で構成した主張に対して客観的妥当性を付与するという機能を持つため、結論の提示・提言で使用されやすいのだと考えられる。下の 9）は、「と言える」を使用している例である。

9）まず、コロケーションの使用頻度は、日本語能力が上がるにつれ高くなり、日本語能力との間に相違が見られたが、下位群と上位群の間にしか有意差が見られなかった。コロケーションは、上級学習者にとっても難しく、その習得の発達が遅いと言える。

（『日本語教育』166 号, p.72）

4.1.3.3 傾向を表す形式

結論の提示・提言では「がち」の使用は見られるが、使用回数は一回のみである。これは、悪いことを想定する意味を持つ「がち」を結論の提示・提言で使用するのはあまり相応しくないためだと考えられる。下の 10）は「がち」を使用している例である。

10）まず、中・上級の日本語学習者は初対面の雑談相手の発話を否定する際、何らかの調整行動を伴うことが多い。しかし、その調整行動は最低限の情報（話し手が正しいと考える情報）の追加のみになりがちである。

（『日本語・日本語教育研究』8 号, p.195）

4.2 研究の評価におけるモダリティの使用実態

研究の評価において、認識のモダリティや評価のモダリティなどの形式が使用されていることがわかった。研究の評価におけるモダリティの使用をまとめると表 4 のようになる。

表 4　研究の評価におけるモダリティの使用実態

認識のモダリティ	その他	評価のモダリティ
推量	意見・判断	必要性
形式：編数、総編数あたりの出現率		
「だろう」　6 編、15%	「と考えられる」　8 編、20% 「と考える」　5 編、12.5% 「と思われる」　1 編、2.5%	「必要がある」　14 編、35% 「べきだ」　1 編、2.5%

各形式の総編数あたりの出現率を見ると、推量や意見、必要性などを表す形式が使用されており、その中で必要性を表す形式の出現率が最も高いということがわかる。以下、研究の評価における各形式の使用について述べる。

4.2.1 推量を表す形式

結論の提示・提言と同様に研究の評価では「だろう」の使用も見られる。これは「だろう」は主張を控えめにする断定回避の用法があり（日本語記述文法研究会 2003）、研究の不足部分に対し書き手が評価の断定を回避するために「だろう」が使用されているのだと考えられる。しかし、前述したように「だろう」は主観的形式とされているため、表 6 の通り、必要性を表す「必要がある」より使用される頻度が低い。下の 11）は「だろう」を使用している例である。

11）本稿では、「模様だ」の発達と新聞文体の関連性については充分に述べることができなかった。また、他の名詞との比較においても不足している点があろう。

（『日本語の研究』第 13 巻 3 号, p.13）

4.2.2 意見を述べる形式

結論の提示・提言と同じく研究の評価では「と考えられる」「と考える」「と思われる」も使用されており、その中で「と考えられる」の出現率が最も高い。これに関しては、「と

考えられる」は主観度を下げて客観度を高める形式、「と考える」は結論を表す意味を持っているため、この二つは研究の評価においても使用されやすいのだと考えられる。しかし、研究の評価で「と思われる」は一回しか使用されていない。これは、結論の提示・提言で述べたように、論理的な意味を考慮すれば、「と考えられる」と「と考える」の方が使用されやすいということである。下の 12）は意見を述べる形式で最も出現率の高かった「と考えられる」を使用している例である。

12）本稿の結果が日本語母語話者とベトナム語母語話者が接触する場面における異文化コミュニケーションの誤解や摩擦を最小限に抑えるのに有効なものになると考えられる。

（『日本語・日本語教育研究』8 号, p.214）

4.2.3 必要性を表す形式

研究の評価では「必要がある」と「べきだ」の使用が見られる。その中で「必要がある」の出現率が最も高い。理由としては、高梨（2010）で提案されているように、「必要がある」は事態の実現の客観的必要性を表すものであるためだと考えられる。つまり、書き手が主観性を避けながら、研究の不足部分に対する評価を示すということである。そのため、研究の評価で多用されているのだと言える。下の 13）は「必要がある」を使用している例である。

13）さらに、日本語学習者の直接的な、または調整行動が不十分ではない否定発話がその後の発話連鎖、相互作用にどのような影響を与えるのかも探る必要がある。

（『日本語・日本語教育研究』8 号, p.195）

次に、「べきだ」の使用について述べる。研究の評価で「べきだ」を使用した論文は一編しかない。「必要がある」と異なり、「べきだ」は事態に対する書き手の主観的評価を表す形式とされており（高梨 2010）、読み手からの信頼が得られないために研究の評価であまり使用されていないのだと考えられる。下の 14）は「べきだ」を使用している例である。

14）会話指導の際、指導の効果を高められるようにモデル会話を暗記させるのみならず、依頼会話を構成する発話機能とその展開パターンも指導すべきである。

（『日本語・日本語教育研究』8 号, p.214）

4.3 今後の課題の提示におけるモダリティの使用実態

今後の課題の提示において要望と意志を表す形式が使用されていることがわかった。今後の課題の提示におけるモダリティの使用をまとめると、表 5 のようになる。

表 5　今後の課題の提示におけるモダリティの使用実態

要望	意志
形式：編数、総編数あたりの出現率	
「たい」　24 編、60%	「スル形」　2 編、5%

各形式の総編数あたりの出現率を見ると、要望を表す「たい」が最も使用されているということがわかる。以下、今後の課題の提示における各形式の使用について述べる。

4.3.1 要望を表す形式

今後の課題の提示では「たい」の使用が見られる。表 5 の通り、「たい」の出現率が最も高い。これは、高梨（2010）で指摘されているように、「たい」は一般の人々の望ましいことを表す意味を持つためだと考えられる。すなわち、今後さらに調べることに対し書き手が客観的要望を表すということである。そのため、今後の課題の提示で「たい」が多く使用されているのだと言える。下の 15）は「たい」を使用しているである。

15）今後も対象を変えて現代における文字言語の実態を把握し、非標準的なカタカナ表記がなされる仕組みを探っていきたい。

（『日本語・日本語教育研究』8 号, p.136）

4.3.2 意志を表す形式

今後の課題の提示では「スル形」の使用が見られるが、二回しか使用されていない。理由としては、日本語記述文法研究会（2003）で述べられているように、「スル形」は書き手自身の行為の実行を一方的に読み手に伝える用法を持っているが、その行為が読み手に関わっていないような場面で使用されるのだと考えられる。言い換えれば、今後の課題に対し書き手自身の主観的な行為の実行のみを表すということである。したがって、読み手からの共感を得るために今後の課題の提示で「スル」があまり使用されていないのだと考えられる。下の 16）は「スル形」を使用している例である。

16）読み誤りが多い学習者と読み誤りが少ない学習者の違いを分析し、読み誤りが少ない学習者はどのようにして適切な理解をしているのかを明らかにする。

（『日本語教育』167 号, p.27）

4.4 総考察

以上の結果から、日本語学系学術論文の結論におけるモダリティの使用実態を次のようにまとめておきたい。

（1）まず、結論の提示・提言では推量や蓋然性を表す形式より意見を述べる形式の方が多く使用されているということである。結果で見られたように、推量を表す「だろう」や可能性を表す「かもしれない」より意見を述べる「と考えられる」の方が出現率が高い。これは、これらの形式が持っている意味や用法だけでなく、その判断の主観性・客観性と関係があるためだと考える。結論の提示・提言で書き手が考察したことに関する意見・判断を表すとともに、読み手からの信頼も得ようとしていると考えられるため、主観度を下げて客観度を高

める形式が多用されるのだと言える。つまり、結論の提示・提言で書き手は主観性を避けるために意見・判断を表しているということである。

(2) 次に、研究の評価では推量や意見を述べる形式より必要性を表す形式の方が多く使用されているということである。結果で見られたように、推量を表す「だろう」や意見を述べる「と考えられる」より必要性を表す「必要がある」の方が出現率が高い。結論の提示・提言と同様に研究の評価においても書き手が研究の不足部分に対する評価を示すのみならず、その評価について読み手からの信頼も得ようとしていると考えられる。したがって、研究の評価には評価の意味を持っており、客観的必要性を表す「必要がある」が最も相応しいのだと言える。すなわち、研究の評価で書き手は主観性を避けるために研究の評価を示すのである。

(3) そして、今後の課題の提示では意志を表す形式より要望を表す形式の方が多く使用されているということである。結果で見られたように、意志を表す「スル形」より要望を表す「たい」の方が出現率が高い。結論の提示・提言と研究の評価と同じように、今後の課題の提示においても書き手が今後さらに調べることを示すだけでなく、その調べることについて読み手からの共感も求めていると考えられる。そのため、客観的要望を表す「たい」が最も選択され使用されているのだと言える。言い換えれば、今後の課題の提示で書き手は主観性を避けるために今後の課題を示しているということである。

5. おわりに

本研究では日本語学系学術論文の結論におけるモダリティの使用実態を考察した。結論におけるモダリティの使用は次のようにまとめることができる。結論の提示・提言においては書き手が主観的な形式を避け、主観度を下げて客観度を高める形式を使用して、結果に関する意見を述べることが多く、研究の評価においては書き手が客観的必要性を表す形式を使用して、研究の不足部分に対する評価を示すことも多い。また、今後の課題の提示においても結論の提示・提言と研究の評価と同じように今後さらに調べることを示すのに、客観的要望を表す形式が多く使用されている。この三つの要素におけるモダリティの使用実態を見ると、読み手からの信頼や共感を得るために、書き手が使用するモダリティの各形式の意味や用法、機能はもとより、主観性・客観性の視点も考慮しながら、各形式を使用しているということがわかった。

今回の結果より、日本の大学院に留学する日本語学習者にとって論文執筆の際、モダリティの形式を適切に使用する上で各形式の意味や用法を考慮することはもとより、その形式は主観的・客観的な意味合いが含まれているかということも考慮しておく必要があると考える。なお、今回は用例数が少なかったため、今後モダリティの使用と視点をより理解するために、さらに数を増やして考察する必要がある。また、本研究は日本語学系学術論文におけるモダリティの使用実態のみを対象にしたが、今後幅広く理解するために他の分野の学術論文におけるモダリティの使用についても考察したい。

＜参考文献＞

小森万里（2014）「アカデミック・ライティングにおける意見を述べる文末表現の使用傾向―『と思う』『と考える』『と思われる』『と考えられる』をめぐって―」『論文報告書 タイ国日本研究国際シンポジウム』pp.209-223

川端元子（2013）「大学生のレポートに出現する「思う」と「考える」の機能について―伝達の側面から見た問題点―」『愛知工業大学研究報告』pp.77-84

佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子（2013）「学術論文の構造型とその分析―人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に―」『日本語教育』154, pp.85-99

澤田治美（1993）『視点と主観性－日英語助動詞の分析－』ひつじ書房

高梨信乃（2010）『評価のモダリティ　現代日本語における記述的研究』くろしお出版

高橋圭介（2003）「引用節を伴う『思う』と『考える』の意味」『言語と文化』4, pp.99-114

テュシェ・シモン（2006）「文末表現『と思う』の用法と話し手の役割」『日本語学論集』2, pp.91-103

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

森山卓郎（2000）「『と言える』をめぐって―テクストにおける客観的な妥当性の承認―」『言語研究』118, pp.55-79

森山卓郎（2002）「可能性とその周辺―『かねない』『あり得る』『可能性がある』等の迂言的な表現と『かもしれない』―」『日本語学』21(2), pp.17-27

Halliday, M.A.K. 1985. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold

＜例文出典＞

『日本語教育』163 号、2016 年 4 月

『日本語教育』165 号、2016 年 12 月

『日本語教育』166 号、2017 年 4 月

『日本語教育』167 号、2017 年 8 月

『日本語・日本語教育研究』8 号、2017 年

『日本語の研究』第 13 巻 3 号、2017 年 7 月

---

[1]本研究は Halliday（1985）で対案された「モダリティの値」に基づいてモダリティの使用を考察する。この「モダリティの値」とは判断の程度に結びつく「値 value」で、「高位 high」、「中位 median」、「低位 low」の三つレベルがある。